

教職課程科目「特別活動の指導法」の 学習内容および方法に関する一考察

—— コロナ禍における学生会活動および学校行事を事例として ——

根本 想¹⁾ 正保 佳史²⁾ 和田 博史³⁾ 長谷 孝治⁴⁾

A Study of the Contents and Methods of Special Activities:

The Case of Activities of the Student Council and School Events during the COVID-19 pandemic

So Nemoto Yoshifumi Shoho Hiroshi Wada Koji Hase

Abstract

The purpose of this study was to clarify the process of planning and organizing school events during the COVID-19 pandemic. Participants were three school council officers. Data were collected using a semi-structured interview and analyzed using the Trajectory Equifinality Modeling (TEM).

The following three conclusions were made:

- 1) The COVID-19 pandemic may have caused a loss of initiative among junior college students.
- 2) Teachers will need to provide extensive support in recruiting students to participate in the activities of the students' association during the COVID-19 pandemic.
- 3) By incorporating the invention and practice of "YURU SPORTS" into the "Methods of Teaching Special Activities" class, we can change students' view of sports and broaden their choice of activities in sports festival.

Key words: activities of the student's association, health, safety, and physical education events, sports festival, YURU SPORTS, esports

キーワード: 生徒会活動, 健康安全・体育的行事, 体育祭, ゆるスポーツ, eスポーツ

I 緒 言

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19; 以下「新型コロナウイルス」と略す) の世界的流行 (パンデミック) によって、日本では、2020年3月2日から政府の要請によって全国の小学校、中学校および高等学校で一斉臨時休業が行われた。同年

4月7日には政府の緊急事態宣言が発出され、4月16日に全都道府県が緊急事態措置の対象となり大部分の学校が5月末まで臨時休業を行った (文部科学省, 2021, p.4)。2020年6月頃から学校は順次再開されていったものの、2021年12月現在においてもなお、学校教育活動を継続するためには、時々地域の感染状況に応じた感染症対

1) 育英短期大学現代コミュニケーション学科
2) 育英大学教育学部教育学科スポーツ教育専攻
3) 育英大学教育学部教育学科児童教育専攻
4) 育英短期大学保育学科

策の徹底が求められる状況に変わりはない。

学校での感染症対策として、文部科学省（2021）は、「新型コロナウイルス感染症対策の状況分析・提言」（令和2年5月29日）（新型コロナウイルス感染症対策専門家会議，2020）に示された「新しい生活様式」の実践例として挙げられている、「3つの密（密閉・密集・密接）」（以下「三密」と略記する）を避けること、「人との間隔が十分とれない場合のマスクの着用」および「手洗いなどの手指衛生」といった基本的な感染症対策の導入を要請している。そして、こうした対策の徹底によって学習内容や活動内容を工夫しながら、できる限り「授業や部活動、各種行事等の教育活動を継続し、子供の健やかな学びを保障していくこと」の必要性を訴えている（文部科学省，2021，p.12）。

このように、コロナ禍における学校教育では、従来どおりの学びの保障が重要な課題となっている。しかしながら、2021年12月現在においてもなお、三密の回避によって従来と同様の学びを保障することが困難となっている活動が存在する。その代表的な例の一つが、本研究が対象とする特別活動である。2020年6月19日から7月15日にかけて、日本特別活動学会が会員（2020年9月現在578名）を対象に実施した「新型コロナウイルス予防対策への対応を踏まえた特別活動の課題と今後に関する調査」（日本特別活動学会研究推進委員会コロナ禍下の特別活動に関する学会員対象アンケートWG，2020）によると、一斉臨時休業が終了して学校が再開されて以降の時期においてもなお特別活動の実施に関する制約が「非常にあった」と回答した割合は81.3%を占めたという。また、同調査では、実数が示されていないものの、特別活動を構成する活動¹の中でも、特に学校行事が実施困難であったことが示唆されている。コロナ禍において学校行事の実施が困難である点については、文部科学省、教育委員会、各学校のホームページや新聞記事を対象として、コ

ロナ禍における特別活動の実施状況について調査した田中ほか（2021）によっても示されている。

学校行事は、高等学校学習指導要領によると、集団で協力し、よりよい学校生活を築くための体験的な活動を通して、集団への所属感や連帯感を深めることで、「多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となること」（文部科学省，2019a，p.478）を理解し、行動できるようにすることが目標とされている。実際に先行研究においても、学校行事によって「対人関係能力」（廣瀬ほか，2010）、「他者との相互理解」（樽木・石隈，2006）、「自己効力感や学校適応感」（横山，古田，2012）が高まることが明らかにされている。こうした知見からも、学校行事は学校教育において重要な役割を果たしてきたと考えられる。しかし、コロナ禍においては、学校行事として確保していた授業時間を、遅れている主要5教科の授業時間に充てる学校もあったことが指摘されている（田中ほか，2021；鶴田，2021）。

世界の感染状況に鑑みても、いまだに事態の収束の見込みがあるとは言い難い状況にあることや学校教育における学校行事の重要性をふまえると、「コロナ禍において、いかにして学校行事を企画・運営していくか」という問いに答える作業が求められていると考えられる。そこで、本研究では、コロナ禍における学校行事の企画・運営プロセスの一端を解明していきたい。

コロナ禍における学校行事について言及した先行研究では、各学校の努力や工夫によって修学旅行、文化祭、体育大会といった学校行事が開催された事例が報告されている。しかし、それらの多くは、現場の教員による実践報告（村瀬，2020；佐藤，2021）や新聞記事に掲載されていた事例を紹介したもの（田中ほか，2021；登坂，2021）であるため、コロナ禍における学校行事の企画・運営プロセスの詳細が十分に解明されているとは言い難い。

一方で、公立小学校教員への面接調査を通して、

コロナ禍における特別活動の指導に対する意識の変容プロセスについて考察した鶴田（2021）の研究からは、コロナ禍における学校行事の中止から、再開に向けて動き出すまでのプロセスの詳細を読み取ることができる。そこでは、小学校教員が文部科学省や教育委員会からの度重なる通達に翻弄された結果、学校行事の開催を断念していった経緯、学校行事の「安易な代替え（ママ）案」として「楽しみの創出」を目的とした活動を学級活動の時間に取り入れてみたものの、学校行事の穴を埋めることはなく、児童たちから徐々に自信や主体性やコミュニケーション能力が失われていった経緯、児童の変化に危機感を覚えた教員たちが「新たな生活様式」を取り入れた学校行事の開催を模索しようとする経緯について、その詳細なプロセスが記されている。鶴田（2021）が、質的研究のアプローチを採用した結果、上記プロセスの詳細を解明した点については、本研究に大きな示唆を与える。

しかしながら、鶴田（2021）の研究では、教員たちが学校行事の再開に向けて動き出した段階までしか扱っていないため、学校行事を実際に企画・運営していくプロセスの詳細については十分に明らかにされていない。また、分析対象が教員となっていることから、児童・生徒・学生の視点から学校行事の中止や再開がいかに捉えられていたのかについては不明である。これらの点をふまえて、本研究は、学生を分析対象として、コロナ禍における学校行事の企画・運営プロセスを明らかにすることを目指す。その際に、本研究は、鶴田（2021）に倣って質的研究のアプローチを採用する。質的研究を行う場合、一般的には分析対象を限定する必要がある。そこで、本研究では、調査への協力が得られたことから、X短期大学Y学科で学生会役員がコロナ禍において体育大会を企画・運営した1事例を分析対象とした。

以上をふまえて、本研究では、学生会役員への面接調査を通して、コロナ禍における学校行事の

企画・運営プロセスを明らかにすることを目的とする。そして、最終的に本研究から得られた知見をもとに、教職課程科目「特別活動の指導法」の学習内容および方法について考察していきたい。

Ⅱ 方 法²

本研究では、鶴田（2021）の研究をふまえて、対象者の主観的な体験に対する意味づけに焦点を当て、多様なデータから帰納的に仮説や理論を生成することによって、十分に解明されていない現象や人々の体験の特徴を探索する際に有効性を発揮する（能智，2000）とされている質的研究法を採用することとした。

データ収集の方法としては、既存の理論を相対化した上で幅広いデータ収集を可能にすると考えられることから、半構造化面接法を用いた。また、時間軸を捨象せずに個々の経験の分析が可能となることから、複線径路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model；以下“TEM”と略す）を用いて分析を行った。

以下では、本研究の方法について具体的に記述していく。

1 調査協力者

202X年度のコロナ禍において学生会主催で学科の学生を対象とした体育大会を企画・運営したX短期大学Y学科の学生会役員3名（Aさん、Bさん、Cさん）を調査協力者とした。調査協力者の属性に関する記述は、倫理的配慮のもと、個人が特定されない程度の記述にとどめることとする。

なお、TEMでは、調査協力者数について「1・4・9……の法則」が提示されている（安田・サトウ編，2012）。当該法則によると、TEMによる調査協力者数は、1、4±1、9±2、16±3、25±4……という具合で、異なる利点があるという。本研究の問題意識や目的に従うと、まずは3名の

学生会役員で一つの学校行事を企画・運営するプロセスの全体を解明する作業が求められる。そのため、学生会役員間の経験の多様性を描くことについては、今後の課題としたい。つまり、本研究の場合は、調査協力者数は3名になるが、あくまでも1件の事例を分析することに主眼を置く。

したがって、本研究では「1・4・9……の法則」に当てはめる数を調査協力者数ではなく調査事例数とする。つまり、調査事例数が1件となる本研究は、個別事例の径路の深みをさぐることが可能となる点に強みがあると考えられる。また、当該法則によると、1件では事例数が少ないと考えて、事例数を倍の2件にしたとしても、「研究の質」が良くなるわけではなく、かえって「中途半端」になってしまう可能性が高いという。先行研究の蓄積が浅いことやコロナ禍において調査協力者（事例）の確保が困難であることから、まずは1件の事例の分析を通して、1事例の径路の深みを探索することに研究の力点を置くことにする³。

2 データ収集および倫理的配慮

データの収集には、半構造化面接法を採用した。また、先述のとおり、本研究は1事例を対象とした研究としてデザインされていることから、学生会役員がコロナ禍において体育大会を企画・運営するプロセスの全体を解明することに主眼があり、学生会役員間の経験の多様性を描くことは目的としていない。そのため、個人面接法ではなく、集団面接法でデータを収集した。

面接では、「学生会に入った経緯」、「体育大会を開催するに至った経緯」、「体育大会を企画・運営していく経緯」について、具体的なエピソード

を交えつつ語ってもらった。面接中に気になる語りがみられた場合は適宜質問を追加していった。

面接は、202X年10月に行い、場所は、第三者に内容を聞かれることなく、落ち着いて話することができる教室を複数確保した後、調査協力者の意向をふまえた上で決定した。面接時間は、合計1時間8分25秒であった。

面接はすべてICレコーダーによって録音し、筆頭著者によって逐語記録を作成した。その際、人名はすべて匿名化し、個人情報の保護に配慮した。逐語記録は、合計19,946文字、A4判で全48枚となった。

3 体育大会の概要

202X年6月にX短期大学Y学科で開催された体育大会は、2コマ連続で組まれている学科必修授業の時間を活用して行われた。企画・運営の大部分を調査協力者である学生会役員3名が担当した。実施競技は、玉入れ、長なわ跳び、ピンポン玉リレー（リレー形式でスプーンを使ってピンポン玉を運ぶ）の3種目であった。当日のプログラム（抜粋）は、表1のとおりである。

4 分析の手続き

まず逐語記録のデータを意味のまとまりごとに分類して、分析における最小単位とした。次いで、それぞれに端的に内容を表す見出しをつけてコード化し、時間軸に沿って並べた。さらに、コードを「必須通過点」、「状況・出来事・行為」、「抑制要因」、「促進要因」に分類して⁴、非可逆的時間軸に沿って配列し実線矢印で径路化してTEM図を作成した。また、データからは見出されなかつ

表1 体育大会のプログラム（抜粋）

14:40~15:10	15:10~15:40	15:40~15:50	15:50~16:20	16:20~16:30	16:30~17:10	17:10~
開会式、 アイスブレイク	玉入れ	休憩	長なわ跳び	休憩	ピンポン玉リレー	閉会式

※学生会役員作成のプログラムをもとに筆頭著者作成

たものの、論理的に考えられる径路は点線矢印で示した。

TEM 図において、「必須通過点」は二重線で、「状況・出来事・行為」は実線で、「論理的に考えられる状況・出来事・行為」は点線で囲んだ。また、「抑制要因」は下矢印の吹き出しで、「促進要因」は上矢印の吹き出しで表記した。また図の上段には六角形で「時期区分」を示した。

コードおよび TEM 図が、データから離れてしまっていないか、データに立ち戻ってくり返し確認するとともに、分析を行った筆頭著者の視点が恣意的なものとなっていないか、共著者と定期的な検討の機会を設けて、分析結果が妥当であるという判断に至るまで討議を重ねた。

さらに、分析結果を調査協力者に送付し、コードおよび TEM 図における誤認等の有無について確認を依頼した。その結果、分析結果に大きな誤りはないとの回答を受けた。以上の手続きをふまえることで、本研究の分析結果は、調査協力者からの同意が得られたものとなっていると考えられよう。

5 倫理的配慮

倫理的配慮として、調査協力者には、依頼時に本研究の趣旨を説明し、拒否の自由を示した上で同意を得るようにした。また、面接開始時にも改めて本研究の目的、データの保護と回答拒否の自由、ICレコーダーでの録音に関して説明し、面接承諾書に署名してもらった。

Ⅲ 結 果

分析の結果、学生会役員がコロナ禍において体育大会を企画・運営するプロセスは、図 1、2、3 の TEM 図のようにまとめられた。以下では、時期区分は【 】, 必須通過点は『 』, その他のコードは〈 〉, 逐語記録からの引用は「 」で示す。逐語記録からの引用に際しては、発言者と逐語記

録のページ数を記した。なお、引用箇所複数人の発言があった場合は引用文中に () で発言者を記した。

学生会役員がコロナ禍において体育大会を企画・運営するプロセスは、【学生会に入るまで】(第Ⅰ期)、【体育大会の開催を決意するまで】(第Ⅱ期)、【体育大会当日を迎えるまで】(第Ⅲ期)、【体育大会の運営を終えるまで】(第Ⅳ期)、【体育大会終了以降】(第Ⅴ期) の五つの時期区分に沿って進行していく過程であることが明らかになった。図 1 は第Ⅰ期と第Ⅱ期、図 2 は第Ⅲ期、図 3 は第Ⅳ期と第Ⅴ期の TEM 図となっている。

以下では、時期区分ごとにその詳細について記述していく。

1 学生会に入るまで (第Ⅰ期)

A さん、B さん、C さんの 3 名は、1 年次から学生会役員募集の一斉送信メールを受信して (〈学生会役員募集の一斉送信メールを受信する〉)、学生会の存在自体は認知していた。しかしながら、1 年前期は分散授業⁵ によって一斉での対面授業がほとんどなく (〈一斉対面授業がない〉)、キャンパスに足を運ぶ機会が少なかったこともあり、一斉送信されたメールを丁寧に読むことはなかった (〈メールの斜め読み〉)。そのため、3 名ともこの時点では、学生会に入るという選択には至らなかった (〈学生会には入らない〉)。

このような状況の中、3 名は〈学科長からオープンキャンパススタッフに推薦される〉ことになる。A さんは、当時のゼミ担任が学科長であったこと、B さんと C さんは姉が X 短期大学の卒業生であったことが推薦された理由ではないかとそれぞれふり返っている。結局、「やってみようかなみたいな (笑)」(A さん, p.8)、「まあ妹もやってやろうか (笑) みたいな」(C さん, p.9) という語りからも窺えるように、比較的軽い気持ちで 3 名とも〈オープンキャンパススタッフになる〉。そして、オープンキャンパススタッフとしての仕

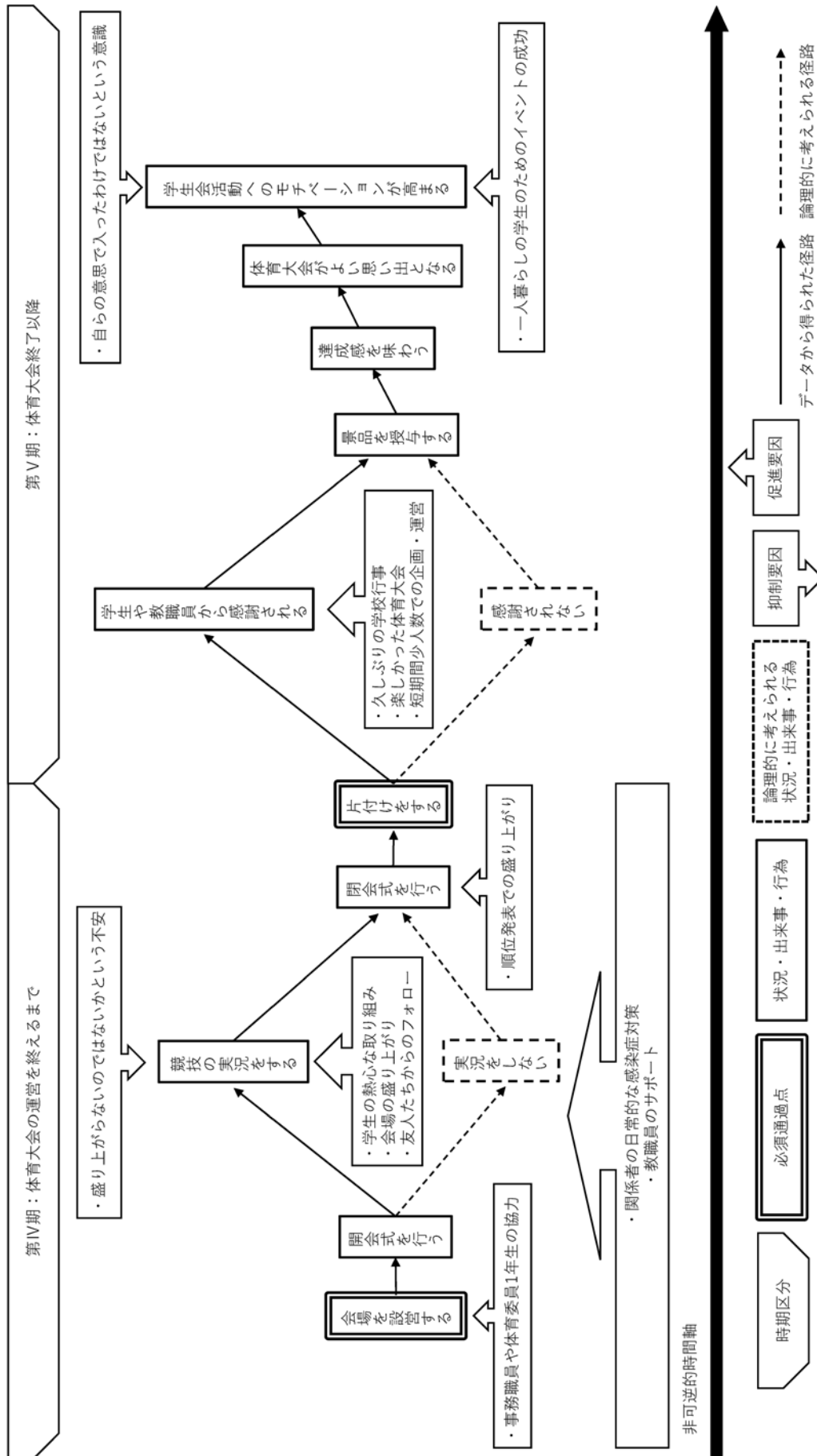


図3 学生会役員によるコロナ禍での体育大会の企画・運営プロセス（第Ⅳ期および第Ⅴ期）

事をくり返すうちに、学生スタッフ全員で〈オープンキャンパス後に毎回ご飯に行くようになる〉。また、3名は、それぞれ〈所属コースが違う〉ものの、〈分散授業で同グループ〉であり、さらに〈同じ授業の履修〉をしていたため、オープンキャンパス時だけでなく隔週で行われる対面授業でも顔を合わせる機会が多かった。このような偶然も重なって3名は日に日に〈仲良くなる〉。実際に、Aさんは「今仲良くなれてる子が多分全員、いたら、集まったら（一斉対面授業を行っていたら）こんなに仲良くなれてなかったと思う」（Aさん、p.44；括弧内引用者）とふり返っている。

オープンキャンパススタッフの仕事を通して、3名は学生同士だけでなく、教職員とも交流する機会が増えていった（〈オープンキャンパスでの教職員との交流〉）。オープンキャンパススタッフとしての仕事ぶりが評価されたこともあってか、2年次の春に事務局の前を歩いていたAさんとBさんは、学生会役員になるよう〈事務職員から対面で勧誘される〉。しかし、学生会役員になることに対しては、〈オープンキャンパススタッフよりもハードルが高い〉と感じていただけでなく、そもそも〈活動内容が不明〉であったことも相まって〈やる気がそこまで湧いてこない〉状態であった。事務職員からの誘いを断るという選択肢はなかったのか尋ねたところ、Bさんは「えちょっと考えたかな」（Bさん、p.10）と答えている。しかし、結局AさんとBさんはCさんを誘って三人で『学生会に入る』ことにする。「一人だったらやらない」（Bさん、p.10）、「一人だったら絶対やらない」（Cさん、p.10）と考えていたものの、「でも三人でやるならいいかなあみたいなの（Cさん）。うんうん（Aさん、Bさん）」（p.10）と語っているように、上述の過程を通して仲を深めていった三人で一緒に入るのであれば、という考え（〈三人一緒ならOK〉）のもと、3名は学生会役員になった。

2 体育大会の開催を決意するまで（第Ⅱ期）

新型コロナウイルスの影響で1年次2年次と2年連続で体育大会が中止となっていたこともあり（〈2年連続での体育大会の中止〉）、ある日の授業後に学生会役員のAさんとBさんは、突然〈学科長から体育大会の開催を提案される〉。当時は、X短期大学の所在地が対象区域にはなっていなかったものの、〈首都圏での緊急事態宣言発出期間〉であったことから、はじめはコロナ禍での行事開催に対して戸惑いながらも（〈コロナ禍での行事開催に対して戸惑う〉）、ひとまず3名は〈学生会主催で開催できるか考える〉ことにする。しかし、1年次も体育大会が中止になっていたことからコロナ禍での体育大会の開催は〈前例がない〉状態であること、学生会役員が3名であること（〈学生会役員が少ない〉）、学科長から指定された〈開催予定日までの期間が短い〉（約1か月）こと等が重なって、開催は不可能ではないものの、困難であると思われるような状況であった。〈学生会主催で開催できるか考える〉以前の問題として、「別にみんなやりたくないなら、やらなくてもいい」（Aさん、p.2）という考えがあったため、「三人だけとかで決められないから（〈三人では決められない〉）、周りの意見を聞いた方がいいよねえみたいな話」（Aさん、p.2；括弧内引用者）をして、〈友人に意見を聞く〉ことになる。その結果、友人たちからは、コロナ禍で学生生活の思い出がほとんどなく（〈思い出がないという友人の意見〉）、思い出となるイベントがあってもよいのではないかと意見があった。コロナ禍によって〈行事の中止が当たり前の日常〉を過ごしていたため、当初は体育大会の開催に対しても積極的な姿勢をとることはなかった3名であったが、友人たちの意見を聞くにつれ、コロナ禍以前の〈楽しかった高校生活〉や〈楽しかった学校行事の記憶〉がよみがえり、それらと対照的な〈短大1年次の退屈な学生生活〉に嫌気がさしてきて、徐々に3名の中にも〈短大生活での思い出がほしい〉

という思いがこみ上げてくる。その結果、学生会役員3名は、思い出づくりのために学生会主催の体育大会の開催を決意することとなった（『思い出づくりのために開催を決意する』）。

3 体育大会当日を迎えるまで（第Ⅲ期）

学生生活の思い出づくりのために学生会主催による体育大会の開催を決意した3名は、体育大会の企画に取り組んでいく。しかし、学生会では体育大会だけでなく、同時期に開催予定の〈一人暮らしの学生のためのイベントの企画〉も並行して行わなければならなかった。さらに、〈学生会役員が少ない〉だけでなく、当時のAさんとCさんは〈就職活動〉中でもあり多忙を極めていた。また、先述のとおりコロナ禍での体育大会開催の〈前例がない〉ため、〈これまでの体育大会の経験が活かさない状況〉にあった。これら多くの抑制要因があって、体育大会の企画は「大変だった」（Aさん、p.11）という。

このように、体育大会の企画にあたっては多くの障壁が立ちだかっていた。しかし、Aさんには、「なんか二人がいるから大丈夫かなみたいな、感覚」（Aさん、p.41）が常にあり、「体育大会も、なんとかなる、二人がいればなんとかなる」（Aさん、p.41）と考えていて、Bさんも「ほんとにそうじゃない？」（Bさん、p.41）と同調していた。こうした語りからも窺えるように、〈この三人なら大丈夫という根拠なき自信〉が3名を突き動かす原動力となっていた。また、理想としては〈高校時代の体育大会のように盛り上げたいという思い〉が、現実的な問題としては就職活動に専念するためにも〈早く終わらせたい〉という切実な動機が体育大会の企画を促進させる大きな要因となっていた。ほかにも、第Ⅲ期を通して、メッセージングアプリを活用した学生会役員間での定期的な意見交換（〈LINEによる役員間の定期的な意見交換〉）や〈教員との意見交換〉を行っていたことも企画を進めていく上で重要な役割を果た

していた。以下では、より具体的に体育大会当日を迎えるまでの過程を記述していく。

〈前例がない〉コロナ禍での体育大会の企画にあたって、はじめに手がかりとしたのが〈高校時代の体育大会の経験〉であった。「クラスの子とかと盛り上がる感じ」（Aさん、p.17）を味わったり、「今まで話したことない子とか、普通になんか、普通に話せ」（Bさん、p.17）たりした経験から、〈ゼミ対抗形式での開催を提案する〉。そして、「ゼミごとに色分けでリボン」（Bさん、p.18）を付けて競技を実施することとなる。

次に、ゼミ対抗形式で行う『競技種目およびルールを考える』作業に移る。ひとまず3名の中で「運動会チックなやつ」（Aさん、p.13）として位置づけられていたドッジボールと綱引きが最初の候補種目として選出されるものの、〈感染症対策の方法が不明〉であり、種目の選定は難航する。そんな折に、〈学科長の助言〉もあって、3名は学科の〈体育系教員に相談する〉ことにする。体育系教員からは、感染症対策のためにマスクを着用したままでも十分に実施可能であること、マスク着用に伴う熱中症対策および運動不足の学生が多いことを想定して運動強度をできる限り低くすること、雨天時も想定して屋内外で実施可能であることといった条件を満たした種目にした方がよいという助言を受けた。その際に、具体例として、運動会の企画・運営を行っている会社のホームページに掲載されていた感染症対策に留意した運動会の競技種目が紹介された。

このように、〈感染症・熱中症対策〉や〈運動不足の学生が多い〉ことによる〈ケガのリスク〉をふまえて〈競技種目およびルールを変更・修正する〉作業をしていく。また、「実際になんか、ね、あんま乗り気じゃない子とかもいると思うから、なんかそういう子にガチでやりますって言ったら、絶対に来ないよねっていうのもあったから」（Aさん、p.4）と考えた3名は、競技種目が〈ガチすぎる〉ことによって参加者が減ってしまうので

はないかという不安もあり（〈参加者減に対する不安〉）、マスクを着用したままでも実施できる運動強度の種目を考えていく。結果的に、表1でも示したとおり、玉入れ、長なわ跳び、ピンポン玉リレーの3種目（雨天時は玉入れ、ピンポン玉リレーの2種目）を実施することとなった。

競技種目が定まってきた頃、3名は『競技プログラム案を作成する』段階に移っていく。しかし、〈雨天の可能性〉を考慮に入れると、三密回避の観点から体育館に学科の全学生を収容することが困難であるため、待機教室の確保や待機中の学生に対する対応が必要となり、プログラム案の作成も思うように進まない。

その頃に、〈冒頭にアイスブレイクを導入する〉ことが決定する。当初は、事前にエントリーシートを作成しておき、「準備運動して、競技を始めてみんなリボンしてればいいよねみたいな、感じだった」（Aさん, p.18）が、「最初に仲良くなっておいた方が、やりやすい」（Bさん, p.18）という考えのもと、〈冒頭にアイスブレイクを導入する〉ことで「エントリーシートを作るのと、同時に、話せる感じを、時間を作った」（Aさん, p.18）という。エントリーシートを大会当日に作成するとなると時間がかかり競技時間が短縮されてしまう。しかし、3名の中にあつた〈効率よりも交流〉を優先するという考えがアイスブレイクの導入を促進したのであつた。

ほかにも、〈適度な予算〉があり、〈教員からの賛同〉もあつたため、〈参加者増への期待〉も込めて〈景品等の物品を購入する〉。最終的には上位3位までのゼミに景品を渡すこととなった。

物品の購入がある程度済んだ頃に、修正を重ねてきた競技プログラムが完成する（『競技プログラムを完成させる』）。これを機に3名は関係者への依頼や連絡をしていく。まずは〈教職員に運営への協力を依頼する〉。そして、景品を出すことに伴い〈公平性を担保する必要〉が出てきたことや、単純に〈人手不足〉であつたことから、いっ

たん中止となつてしまつた体育大会で委員を務める予定であつた〈体育委員1年生に審判および会場設営の協力を依頼する〉。その後、学科の全学生にもプログラムとともに体育大会の案内メールを送信した（〈学生へ連絡する〉）。

結局雨天時は、控え教室のスクリーンに競技の様子をライブ配信することで上述した屋内開催時の三密回避という問題を解決することになつたが、配信テスト等が十分に行えている状況ではなかつた（〈運営に対する不安〉）。また、屋外での開催に比して〈感染症対策への不安〉もあつたことから、3名はひたすら雨が降らないことを祈りつつ（〈雨が降らないことを祈る〉）、『体育大会当日を迎える』こととなる。なお、3名の祈りが通じたのか、当日は雨が降ることなく屋外での開催となつた。

4 体育大会の運営を終えるまで（第Ⅳ期）

体育大会当日は〈事務職員や体育委員1年生の協力〉のもと、『会場を設営する』ことから始まつた。無事に会場設営が終わり、学生を集合させて、3名は〈開会式を行う〉。開会式後には、ゼミごとに集合してエントリーシートの作成も兼ねたアイスブレイクが行われた。その際には、SNSで相互フォローする様子もみられたという。各ゼミのエントリーシートが完成した後、競技が開始される。

〈盛り上がらないのではないかという不安〉を抱えながらも3名は意を決して〈競技の実況をする〉。実際に競技が始まると〈学生の熱心な取り組み〉によって会場は盛り上がる（〈会場の盛り上がり〉）。「結構最初めちゃくちゃ戸惑つたけど、仲いい子とかが、なんかこっちが実況してたら、なんかそれに乗っかってきてくれたりとかしてたから、そこに救われた感あつた」（Aさん, p.43）とふり返るように、〈友人たちからのフォロー〉もあつて実況にもさらに熱が入っていった。そして、大きなケガもなく競技は無事に終了し、〈閉

会式を行う)。

結果発表では、3位が同着となりゼミ担任同士のジャンケンによって3位のゼミを決定することとなった。ゼミ担任同士のジャンケンでは何度もあいことなり、なかなか決着がつかず、大いに盛り上がった(〈順位発表での盛り上がり〉)。このように大盛況の中、学生会役員主催の体育大会は無事閉会した。閉会後は会場設営と同様に事務職員や体育委員1年生の協力のもと撤収作業を行った(『片付けをする』)。また、体育大会の開催および運営にあたっては、〈関係者の日常的な感染症対策〉や〈教職員のサポート〉が不可欠であった。

5 体育大会終了以降(第Ⅳ期)

学生会主催の体育大会は、学生たちにとって(久しぶりの学校行事)であり、多くの学生にとって楽しい時間となった(〈楽しかった体育大会〉)。また、このような学校行事を学生会役員3名が中心となり約1か月という短期間で企画・運営を行ったこともあって(〈短期間少人数での企画・運営〉)、3名は口頭やメールで(学生や教職員から感謝される)。後日、上位3位までのゼミに(景品を授与する)。その後、Aさんにこみ上げてきた感情は以下の語りから十分に伝わるだろう。

実際やってよかったなと思ってます体育大会も。自分たちもちゃんと達成感感じてたし、あの、周りからの反応もけっこう良かったり、終わった後とか、友達とかもそうだけど、後輩も含めて、そのメールとか、送ってくれる人もいたし、先生方からも、色んな先生から連絡、なんかいただいたりとかしてたから、まあ結果的には、なんか、やってよかったなとすごい思います(Aさん, p.42)

この語りからも窺えるように、体育大会の企画・運営を経て、3名は(達成感を味わう)こと

となり、〈体育大会がよい思い出となる〉。

最終的に、〈自らの意思で入ったわけではないという意識〉はどこかにありながらも、同時期に開催した(一人暮らしの学生のためのイベントの成功)も重なり、さらに達成感を味わっていた3名は、〈学生会活動へのモチベーションが高まる)こととなった。

IV 考 察

本研究では、学生会役員がコロナ禍において体育大会を企画・運営するプロセスについて明らかにしてきた。以下では、本研究で得られた知見をもとに、教職課程科目「特別活動の指導法」の学習内容および方法について考察していく。

鶴田(2021)の研究では、学校行事のない学校生活が続く中で児童たちから徐々に自信や主体性やコミュニケーション能力が失われていったことが示唆されていた。短期大学生を対象とした本研究においても、同様の示唆が得られたように思われる。というのも、最終的にコロナ禍における学校行事の企画・運営に成功した学生会役員であっても、学科長から学校行事の開催を提案された直後は、「別にみんなやりたくないなら、やらなくてもいいしみたいな」(Aさん, p.2)といった反応をしていたからである。したがって、コロナ禍において(行事の中止が当たり前の日常)を過ごすことによって、学生から主体性が喪失されてしまっていた可能性があったことが推察されよう。

しかし、本研究の結果からも読み取れるように、コロナ禍における学校行事の企画・運営での成功体験を通してAさん、Bさん、Cさんの3名は、自信や主体性やコミュニケーション能力を取り戻していったように思われる。つまり、鶴田(2021)が分析対象とした公立小学校教員も感じていたように、学校行事を中止とせずに「新しい生活様式」を採用した従来とは異なる形での学校行事の開催が、一定の学習成果に結びつく可能性があると考え

えられよう。

また、本研究から、コロナ禍においては、学生会役員になることのハードルが従来以上に高くなっている可能性が推察される。本研究で明らかにされたプロセスをふまえるならば、学生会に比してハードルの低いと思われるオープンキャンパススタッフのような仕事を経験させることで、徐々に学生会に入るように導くことも学生会活動を活性化させる上で重要になるかもしれない。このことは小学校、中学校、高等学校の生徒会活動（小学校の場合は児童会活動）においても、当てはまる可能性があるため、教職課程科目「特別活動の指導法」の授業においても触れておく必要があるだろう。

最後に、体育大会の競技種目の選定について指摘したい。『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説特別活動編』では、「体育に関する行事」の実施上の留意点として、「運動に親しみつつ体力を向上させるというねらいが十分に達せられるようにする」（文部科学省，2019b，p.93；傍点引用者）ことが挙げられている。X短期大学Y学科の体育大会で採用されたピンポン玉リレーについては、体力の向上に資する種目であるとは言いがたい。しかし、Aさんの以下の発言をふまえると、体力の向上に資するとは言いがたいピンポン玉リレーのような種目の重要性が浮かび上がる。

実際になんか、ね、あんま乗り気じゃない子とかもいると思うから、なんかそういう子にガチでやりますって言ったら、絶対に来ないよねっていうのもあったから（Aさん，p.4）。

結局、本研究で扱った体育大会の事例では、感染症・熱中症対策や運動不足の学生が多いことによるケガのリスクといった要因もあったものの、上記のAさんの考えをふまえて「ガチ」すぎる競技種目が極力排除された状態で実施された。また、例年と比べてただでさえ短かった競技時間が

さらに削られてしまうことを承知の上で、〈効率よりも交流〉という考えのもと、学生間のコミュニケーションを図ることを意図して大会当日にエントリーシートの作成も兼ねたアイスブレイクの時間を導入していた。

コロナ禍以前のX短期大学の体育大会では、綱引きやリレー等、今回の体育大会と比して「ガチ」な種目が多く含まれており、種目数や時間も倍に近い形で開催され、競技を円滑に進めるためにエントリーシートの作成も大会前に済ませていた⁶。このように例年とは質・量ともに大きく変化した体育大会であったが、複数の学科教員が学生会役員の名に対して、例年以上に出席率が高く、盛り上がった大会であったという趣旨の発言をしていたという。

これらの諸点をふまえると、コロナ禍における体育大会は、「ガチ」すぎる種目をあえて排除して、コミュニケーションを図るためのアイスブレイクのような時間を増やす形態で開催するのが一つの方法となり得るだろう。このような形を採用した場合、「体育に関する行事」の実施上の留意点の一つである体力の向上を図ることは極めて困難となると考えられる。しかしながら、特別活動全体を通して育成が目指される資質・能力の一つである「多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となること」（文部科学省，2019a，p.478）について、実践を伴って学ぶ機会がコロナ禍においても十分に保障できることになるだろう。

また、「ガチ」すぎない競技種目を考える上で、「世界からスポーツ弱者をなくす」といった理念のもと、「年齢・性別・運動神経に関わらず、だれもが楽しめる新スポーツ」として生まれた「ゆるスポーツ」（世界ゆるスポーツ協会ホームページ，online）がヒントを与えてくれるかもしれない⁷。中学校や高等学校の場合、体育大会の担当が保健体育科の教員である可能性が高い。保健体育科の教員は、「ゆるスポーツ」とは対極の「ガ

手」な競技スポーツに取り組んできた人間が大半を占めている現状をふまえるならば、教職課程科目「特別活動の指導法」においても、「ガチ」すぎないスポーツとしての「ゆるスポーツ」の実践も必要になると考えられる。その際に、新たな「ゆるスポーツ」の開発を行う作業を取り入れることによって、より「世界からスポーツ弱者をなくす」という「ゆるスポーツ」の理念に触れることができるように思われる。

以上をふまえて、本研究では、教職課程科目「特別活動の指導法」の学習内容および方法として、グループワークを通して新たな「ゆるスポーツ」の開発と実践をくり返して、より「世界からスポーツ弱者をなくす」という理念を体現した「ゆるスポーツ」を創造していく実践を取り入れることを提案したい。この実践では、(1)「運動強度の観点からも感染症および熱中症対策が十分に可能な」、(2)「より多くの人が親しみやすい」ルールの競技種目を作成することになる。つまり、この実践によって生まれた競技種目を体育大会に取り入れることは、(1)によってコロナ禍における体育大会開催の実現可能性を高めることに寄与する。それだけでなく、(2)によって特別活動全体で目指される、多様な他者と協働するための資質・能力の育成を図る機会の提供にもつながり得る。また、保健体育科の教員を目指す学生をはじめとする、運動やスポーツに対して特に苦手意識をもっていない学生にとっては、自身のスポーツ観にゆさぶりをかけ、いわゆる運動嫌い、スポーツ嫌いの児童・生徒にも親しみやすい体育大会の競技種目について考える、つまり、他者への想像力を養う実践にもなるだろう。

注

- 1 特別活動は、小学校では、学級活動、児童会活動、クラブ活動、学校行事、中学校では学級活動、生徒会活動、学校行事、高等学校ではホームルーム活動、生徒会活動、学校行事によって構成されている(文

部科学省, 2017a, 2017b, 2019b)。

- 2 本章での記述は根本・岡田(2018)および根本ほか(2020)に多く依拠している。
- 3 安田・サトウ編(2012)によると、4±1人に調査協力者を増やすと、1人の場合では見出すことが困難な「誰もが経験すること」としての必須通過点を見出すことや、経験の多様性を描くことができるという利点が指摘されている。この点については今後の課題としたい。
- 4 TEMでは、非可逆的時間の中で、ある事象を抑制する要因を「社会的方向づけ(Social Direction: SD)」、促進する要因を「社会的ガイド(Social Guidance: SG)」という用語で表記することが一般的である(安田, サトウ編, 2012)。実際にTEMを活用した多くの研究でもこれらの用語が使われている(たとえば, 池田・池田, 2018; 和田, 2016; 安田, 2017)。しかし、本研究では、意味の平明さの観点から、福田(2017)に倣って、SDとSGをそれぞれ「抑制要因」、「促進要因」という用語で表記する。
- 5 分散授業とは、学生を二つのグループに分けて対面授業と遠隔授業を週ごとに交互に行い1回の授業の受講人数を制限することで、教室が三密の状態になることをできるだけ避けて授業を運用する方法を指す。X短期大学では、学科必修科目等一部の授業を除いて調査協力者の入学年次から2年次の11月末頃まで分散授業を行っていた。
- 6 コロナ禍以前のX短期大学の201X年度の体育大会のプログラムによると、9時00分開会15時30分閉会で、ムカデ競争、8の字跳び、綱引き、玉入れ、リレーの5種目が実施されていた。エントリーシートを作成時期については、当時の体育委員の議事録を参照した。
- 7 老若男女を問わず取り組めることから、eスポーツについても同様の可能性が秘められていることを指摘しておきたい。

引用・参考文献

- 福田真清(2017) 老障介護家庭における知的障害者の自立をめぐる母親が経験するプロセス——複線径路・等至性モデルによる分析を通して——. 社会福祉学, 58(2): 42-54.
- 廣瀬真琴・矢野裕俊・梶川裕司(2010) 自主的な学校行事を通じた生音の成長に関する事例研究. カリキュラム研究, 19: 71-83.
- 池田琴恵・池田 満(2018) エンパワーメント評価型学

- 校評価の導入における校長の意識の変容過程. 教育心理学研究, 66(2): 162-180.
- 文部科学省 (2017a) 小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説特別活動編. https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/13/1387017_014.pdf, (参照日 2021 年 12 月 14 日).
- 文部科学省 (2017b) 中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説特別活動編. https://www.mext.go.jp/content/20210113-mxt_kyoiku01-100002608_2.pdf, (参照日 2021 年 12 月 14 日).
- 文部科学省 (2019a) 高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示). 東山書房.
- 文部科学省 (2019b) 高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示) 解説特別活動編. 東山書房.
- 文部科学省 (2021) 学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル～「学校の新しい生活様式」～ (2021.11.22 Ver.7) ※ 2021.12.10 一部修正. https://www.mext.go.jp/content/20211210-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf, (参照日 2021 年 12 月 14 日).
- 村瀬 悟 (2020) 生徒会活動による実行委員会を中心とした中学校の学校行事の取組についての実践報告. 教育学部紀要, 13: 331-342.
- 根本 想・岡田悠佑 (2018) 東京箱根間往復大学駅伝競走出場競技者のキャリア形成に関する事例研究——スポーツを学問の対象としていくプロセス——. 育英短期大学研究紀要, 35: 35-50.
- 根本 想・金沢翔一・岡田悠佑・安田純輝 (2020) 大学体育における水泳授業によってクロールと平泳ぎを「続けて長く泳ぐこと」ができるようになるプロセス——当事者の語りの分析から——. 育英短期大学研究紀要, 37: 41-51.
- 日本特別活動学会研究推進委員会コロナ禍下の特別活動に関する学会員対象アンケート WG (2020) 新型コロナウイルス予防対策への対応を踏まえた特別活動の課題と今後に関する調査. <https://jaseatokkatsu.jimdo.com/app/download/15848609622/%E7%AC%AC1%E5%9B%9E%E3%82%B3%E3%83%AD%E3%83%A8%E8%AA%BF%E6%9F%BB%E5%A0%B1%E5%91%8A%E6%9B%B8201011.pdf?t=1635947090>, (参照日 2021 年 12 月 14 日).
- 能智正博 (2000) 質的 (定性的) 研究法 仮説生成を中心に. 下山晴彦編, 臨床心理学研究の技法. 福村出版, pp.56-65.
- 佐藤健太 (2021) コロナ禍における代替行事開催までの道のり—輝鏡祭行事ゼロの危機に直面して—. 研究紀要, 66: 63-83.
- 世界ゆるスポーツ協会ホームページ (online) <https://yurusports.com/>, (参照日 2021 年 12 月 14 日).
- 新型コロナウイルス感染症対策専門家会議 (2020) 「新型コロナウイルス感染症対策の状況分析・提言」 (令和 2 年 5 月 29 日). <https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/000635389.pdf>, (参照日 2021 年 12 月 14 日).
- 田中真秀・佐久間邦友・山中信幸 (2021) 突発的事項時における学校教育の教育保障に関する一考察—「新型コロナウイルス」における特別活動の実態から—. 川崎医療福祉学会誌, 31(1): 27-34.
- 樽木靖夫・石隈利紀 (2006) 文化祭での学級劇における中学生の小集団の体験の効果——小集団の発展, 分業的協力, 担任教師の援助介入に焦点をあてて——. 教育心理学研究, 54: 101-111.
- 登坂 学 (2021) 新学習指導要領の特別活動はコロナ禍において「生きる力」をどのように育むか——家庭や社旗との連携を通して——. 九州保健福祉大学研究紀要, 22: 35-46.
- 鶴田麻也美 (2021) コロナ禍における特別活動指導の意識変化についての考察—公立小学校教員インタビュー調査から—. 学苑・人間社会学部紀要, 964: 63-76.
- 和田美香 (2016) ひきこもり青年のきょうだいが家族から自律していく過程: 自律を援助するおよび妨げる社会文化的影響. 発達心理学研究, 27(1): 47-58.
- 安田裕子 (2017) 体外受精適応となった女性の不妊経験への意味づけ過程——複線径路等至性モデリングを用いて——. 保健医療社会学論集, 28(1): 12-22.
- 安田裕子・サトウタツヤ編 (2012) TEM でわかる人生の径路——質的研究の新展開. 誠信書房.
- 横山里沙・古田真司 (2012) 体育大会が中学生の自己効力感や学校適応感に及ぼす影響についての検討—自己肯定感の違いに着目して—. 東海学校保健研究, 36(1): 71-80.

(2022 年 1 月 25 日受理)